

ないんじゃないかな……。あの中曽根発言が問題になってからいくらも間がないのに、こういう記事を平気で載せる雑誌がある。日本はアメリカでの非難を知ってから中曽根発言を話題にする国なので、これにいまさら驚く方がおかしいのかもしれない。欧米に対する抜きがたい劣等感、その裏返しであるアジアに対する優越感は、とことんまで我々の体に浸みこんでいるらしい。

同様な話をもう一つ。ある小さな研究会での発言だ。「みんなが国際化というのが、国際化はいいことばかりではない。アメリカから学者が来るだけでなく、フィリピンから拘模が来ることにもなる。」私は啞然としたが、他の同席者は何も感じなかったようだ。悪い例を何のためらいもなくフィリピンに求めることへの私の疑問は、どうやら一同にとって意外だったらしい。

今日、我々が得ている情報は膨大だが、既成観念ないし先入観を修正する働きがあるとは限らない。むしろ、

ステレオタイプ・イメージの補強を行ってはいほしないか。情報の受取人は必ずしも新しい学習のために情報を活用しない。海外へ出かける人が増え直接さまざまな見聞をしても、既存知識いかんによっては、かえって事実を歪めた理解がひろがるおそれがある。歴史の教師に比べ地理の教師は仕事がやりにくい。「私ははっきり見て来ました」、「私は自分で経験しました」と言い張る生徒には、その土地へ行ってない教師が書物を通じての正しい知識を伝えても、公平な判断を教えても、説得力がないのだ。「私は東京に30年住んでいるが、東京について知らないことの方が多い。君はパリにたった5年いただけで全ヨーロッパを知っていると言う。どうしてだ」とたずねても、相手にはわからない場合が多いだろう。こと外国がからむと、我々日本人は病気になる。

(東洋大学)

「頭の中の地図」ということ

中村和郎

Peter Gouldが著わした“Mental Map”という本が日本では「頭の中の地図」という表題で出ている。Peter Gouldといえ、いわゆるnew geographersの一人として豊かな着想を次々に発表したことで知られている。上記の本の中では、「どこに住みたいか」という主観的なことを定量的に扱う道を開いた。環境と人間の関係をゲーム理論で説明しようと試みた数少ない地理学者でもある。地理教育についても斬新的な意見を発表していて、その活動領域は非常に幅広い。

嗜好や価値観の問題は、ここ数十年来地理学の新分野で盛んになってきたperception研究の一つである。perception研究は、人によってさまざまにまとめられているが、このほか、Kevin Lynchの「都市のイメージ」だとか、Gilbert White School(こういう呼び方があるかどうか知らないが)の自然災害だとか、Thomas F. Saarinen(かれもGilbert White Schoolの一人)が現在精神的にすすめている「手書き地図」だとかがある、そのテーマは多方面にわたっている。

さて、「頭の中の地図」というのは、地理学にとってたいへんおもしろい問題ではないかと思う。

よく引きあいにだされるように、ニューヨークっ子

の頭の中に描かれた合衆国の地図は、北東部が肥大していて南部はやせ細っているとか、黒人の地図は白人の居住地区が空白で説明しようあるとか、ともかく、これまで教科書や地図学で教わってきた「正確な地図」とは似ても似つかぬものである。主観的といってしまうとそれまでだが、Lynchの「都市のイメージ」は、そんな頭の中の地図にも構造があると教えてくれた。たしかに、われわれの頭の中にある東京の地図は、地図帳にある通りの正確な地図ではなくて、東京タワーや新宿副都心のようなランドマークや、主要な交通路網などからなる、ずいぶんと不完全なものである。クラスで、知っている都市の地図を書かせてみると、なかに1人ぐらい左右を反対に書く人がいるらしいことも不思議である。ふだん地図を持っていない人のほうが圧倒的に多いということを考えてみれば、人々の日常の空間的行動はこんな不完全な地図をたよりにして行なわれているのかと驚かされる。

しかし、いつも住んでいる都市については、まがりなりにも、構造化された、まとまった地図をわれわれは頭の中に持っているといえそうである。それならば、国について地図を描いたらどうだろうか。Saarinenのよう

に、どれだけ正確な地図に似せて描くかを問題にするのではなくて、市井の人々がどのように国を構造化して頭の中に描いているのかを調べてみたい。首都を含む主要な都市と主要な交通路網とからなりたっているのだろうか。それとも、主要な地形が入った地図なのだろうか。それとも、いくつかの□□地方からなりたっているのだろうか。

最後にあげた□□地方というのは、きっと万国共通の認識の仕方であろう。そのなかでも、国を大きく二つないし三つ程度に地域区分することがかなり普遍的であると思われる。日本を東日本と西日本と分けるのは、歴史的にも文化的にも、あるいはもっとほかの面でも、それなりの理由があることには相違ないが、ほかの国々でも似たような二大地域区分というのが多岐にみえる。小さなムラなどに双分制があることは、社会学でも地理学でも研究があって、双分制はムラを維持していくのに重要な機能を果たしているともいわれる。国の場合は同じなのだろうか。私はそれが何かの機

能を果たしているというよりは、それこそ「頭の中の地図」で二つに分けることがいちばんわかりやすく、いい認識方法だから、これがどこの国でも採用されているのだろうと考えている。

こんな考えは、毒にも薬にもならないヒマ人の考えと思われるかもしれないが、地理教育でその国を教えるときのことを思い出してみよう。その国の自然、文化、貿易などを教えることはあっても、その国の「地図」をどれだけ教えているだろうか。主要都市や目立った地形の位置を教えるかもしれない。それは都市の立地と地形との関係を理解させるなどの意味では重要である。しかし、人間の頭は寸分違わない地図を描くことが不可能なのだとしたら、頭の中にいちばん入りやすい形の地図を教える教育が行なわれていいのではあるまいか。そのためにも、「頭の中の地図」が一体どんな地図なのかということをもっと研究してみたいものである。

(駒澤大学)

政治地理学の季節の再来

斎藤 毅

1. 「国家の時代」と政治地理学

現在の日本では、政治地理学が著しく不振である。戦時中の「地政学」の後遺症から、今なお脱しきれないのかも知れない。

好むと好まざるとにかかわらず、日常生活のすみずみにまで政治がかかわり、さらには政治現象の源泉ともいえる多様な国家がこの地球を被い尽しているのを見ると、まことに現代は「国家の時代」の観が深い。

とかく“政治離れ”が話題になる若者達も、実は国際政治への関心は決して低いものではない。このことは、例えば「国際関係論」が意外に多くの学生達をひきつけていることからもうかがわれる。もっとも、現在の国際関係論の内実は、その創始者の一人であるE・H・カーがそうである様に、政治史の一分野にとどまり、必ずしも政治地理学の発展を刺激するものとはなっていない。

2. 政治地理学の地平の拡大

政治地理学の一般的なイメージからは、領土問題を含む国境論などが中心テーマと考えられがちである。国内の町村合併問題などもその延長といえよう。

こうした問題に関心をもちながらも、オリジナルな研究を手掛けることのなかった筆者が、現代の政治地理学の新たな展開について再認識し、その可能性を再発見したのは、1982年に英国で創刊された《Political Geography Quarterly》に出合ってからである。ここには、“カナダの二言語問題”や“少数民族の文化”等々、現代の政治と深くかかわる文化地理学的諸問題を扱った論文が少なくなかったからである。

文化史的な現象や、ときに好事家的とさえいえる民族現象に関心が偏りがちとなり、とかく浮世離れた文化地理学の研究を手掛けてきた筆者にとって、これは著しく刺激的であった。

3. 新しい座標軸としての可能性

1960年代を境いに、人文地理学は、研究対象についても方法論的にも著しく多様化した。しかもなお、その中心的な対象から政治現象はすっぽり欠落したままとなっている。

一国の経済はもとより、国際経済とて政治なしではもはや機能し難くなっている現在、政治地理学は、経済地理学や文化地理学に十分比肩し得る第三関心をもち